率然と起る即興から、かうしたものが出來るのであらう。或は又、自分が靈案のおもしろさに耽つてさへ居ればよいので、必しもみ山風の歌が、其當時行はれてゐて、人に出所が訣つてゐても、又訣つてゐなくてもよいのであらう。こんなのは、剽竊と言ふべきものではない。

ともかく歌にうまく這入る這入らぬは、第二として、文學風な題材らしいものを感じる力は、十分あつたのである。長歌「月の兎」でもさうである。良寛の手にかゝると、昔咄からでも出たやうな幼げを帶びて來る。

手毬の長歌・短歌の類は、さう言ふ生活が、文學の題材として適切だと知つて居たからなのだ。どうせ、賴まれ强ひられて作つたものだらうが。

形身とて殘す二人の子。見るに心にほだされて、かにもかく
にも　言はむすべ　せむすべ知らにこもり居て、　ねのみし泣
かゆ。朝な夕なに

などは、同情と言ふよりも、文學として作らうとした計畫と、それから惹かれた情熱とが、若

干あるのである。

良寛僧の　今朝の朝葉菜もて逃ぐる御姿　後の世まで殘らむ

此歌なども、ちよつと動機の說明に苦しむものである。禪僧の簡易な生活、其と、わりに簡單に笑うて濟す性分、そんなものの外に、雲水のやうな生活はして居ても、唯の雲水づれと違ふと言ふ臈を經たことの輕い自信、そんなものが一つになつて、此歌に出てゐるのだらう。が其よりもつとはつきり見えることは、自分を一つの文學上の人物――謂ひ替へれば、畫中の人物に考へて來た點に、製作の動機が繫つて居るやうに思はれる。「後の世まで殘らむ」の句で見ると、如何にも自信深いいやなものを感じるが、御姿と言ふ語が置かれてゐるのは、おのれ笑ひこけて、人をも笑はしてゐるのである。見つかつたか。とんだしくじりだ。「昔のお師家なら、こんなことも後世の語り草になるのだらうが、……おれのうろたへて逃げたらう樣子も、ひよつとすれば、さう言ふ風になるかも知れん。さう思つておくれ」この位の氣持であらう。

此人には、不思議な興味といふか、偷盜の上に人間色を認め、其を自分以外のものではないと

言ふ風に、表さうとする傾向のあることで、其重くるしさを救ふのに、一流の笑ひを以て掩うてゐる。

長歌「山寺梅」、又「おなじ一首」、「有則に贈る」の三通りある。

つぬさはふ　岩坂山の山越しに、み寺の梅を垣越しにほの見てしより、むらぎもの　心にかけて、霞たつ　長き春日を忍びかね、夕さり來れば、からにしき　里たち出でゝ、はたすゝき　大野を過ぎて、千鳥なく　濱邊をとほり、眞木立てる荒山越えて、岩が根のこゞしき路を踏みさくみ、辿り〳〵に思ひつゝ、裏門まはり、大寺の垣根に立てば、寺守りの　こや　ぬすびと呼はれば、里に聞えて、……花ぬすびとゝ名のらえし君にはませど　うつせみの　世の事なれば、いつしかも年の經ぬれば、葦の屋の伏せ屋がもとに、夜もすがら　八握の髯をかい撫でゝ

おはすらむかも。この月ごろは

何事も　みな昔とぞなりにける。　花に涙を濺ぐ今日かも

盜人の忍びよる樣の描寫に力を盡してゐる所から、其に對する深い同感、まるで良寛自身行うた事のやうに、澄んだ心に興がつてゐるのが見えるのである。だが此三首類型のものは、有則に與へた一つ事を詠んだものであるが、此などはどうして改作を重ねなければならなかつたのか。假に出來た順をつけると、第一作は「梓弓春の夕に」と言ふ五六句のあるもので、髯のことのない歌、第二作は、「有則におくる」と言ふ詞書のあるもの、第三作が前出の長篇らしく思はれる。なか〳〵長く複雜化したものを、短篇に單純化は出來ないものである。良寛も、詩歌の上には、隨分執心を持つてゐたことだから、さう安々と觀念することは出來なかつたらう。

春の野に若菜つみつゝ　雉の聲聞けば、昔の思ほゆらくに
春の野に咲ける堇を　手につみて、我がふる里を思ほゆるかな
むらぎもの　心樂しも。春の日に　鳥の群り遊ぶを見れば
草の庵に　足さしのべて、小山田の山田の蛙聞くが　樂しさ
この園の梅の盛りと　なりにけり。我老いらくの時にあたりて
子どもらと手携りて　春の野に若菜をつめば、樂しくもあるかな
この里の桃の盛りに　來て見れば、流れにうつる桃のくれなゐ
あしびきの　山田の原に蛙鳴く。獨り寢る夜は　いねられなくに
命あらば、またの春べに來ゐて見む。眺めも飽かぬ四方の櫻を
ひさかたの　雨の霽れ間に出て見れば、青みわたりぬ。四方の山々
あしびきの　かた山陰の夕月夜　ほのかに見ゆる山梨の花
ぢんばそに　酒に　山葵に　賜はるは、春を寂しくあらせじとなり
むらぎもの　心はなぎぬ。永き日に、これのみ園の林を見れば

ひさかたの　空より渡る春の日は、いかにのどけきものにぞ　ありける
あしびきの　尾の上に立てる松柏も、今は春べとなりにけるかも
あひ連れて　旅かしつらむ。時鳥　合歡の散るまで　聲のせざるは
國上山　松風涼し。越え來れば、山時鳥をちこちに鳴く
あしびきの　國上の山の時鳥　よそに聞くより　あはれなりけり
あしびきの　山田のをぢが、日ねもすにい行き返らひ　水はこぶ見ゆ
わくらはに　人も訪ひ來ぬ山里は、梢に　蟬の聲ばかりして
御饗する物こそなけれ。小甕なる蓮の花を見つゝしのばせ
くれなゐの七つの寶を　もろ手にておし頂きぬ。人のたまもの
陶器に酒をたづさへ　あしびきの　山の大根を　をしに來し我が
（良寛作か）
肌寒み　秋も暮れぬと思ふかな。この頃　たえて蟲の音もなし
我が待ちし秋は　來ぬらし。この夕べ叢ごとに　蟲の聲する

飯乞はむ。ま柴や樵らむ。苔清水　時雨の雨の降らぬまに〳〵

風涼し。月はさやけし。いざ　子ども。踊り明さむ。老いのなごりに

たまぼこの　道まどふまで　秋萩は散りにけるかも。行く人なしに

月よみの光りを待ちて　歸りませ。山路は　栗のいがの多きに

山里は　うら寂しくぞなりにける。木々の梢の散り行く見れば

秋風に靡く　山路の薄の穂見つゝ來にけり。君が家べに

秋の日に　光り輝く薄の穂　こゝのお庭に立たして見れば

秋もやゝうら寂しくぞ　なりにける。小笹に雨のそゝぐを聞けば

あしびきの　山のもみぢ葉　散り過ぎて、うらさびしくも　なりにけるかも

夕暮れに　國上の山を越え來れば、衣でさむし。木の葉散りつゝ

行く秋のあはれを　誰とかたらまし。藜籠に充て　歸る夕ぐれ

長月のものかなしきに、くさまくら　旅のやどりに果てし君はも

あしびきの　國上の山の山畠に、蒔きし大根を　あさず喰せ。君

草の庵に寢ざめて聞けば、あしびきの　岩ねに落つるたきつせの音

いにしへを思へば、夢か　うつゝかも。夜は　時雨の雨を聞きつゝ

夜もすがら　草の庵に我が居れば、杉の葉しぬぎ　霰ふるなり

軒も　庭もふり埋めける雪の中に、いや珍しき　人のおとづれ

越の海　野積の浦の海苔を得ば、分けて賜れ。今ならずとも

むらぎもの　心かなしも。あらたまの　今年の今日も、暮れぬと思へば

谷の聲　峰の嵐をいとはずば、かさねて辿れ。杉のかげ道

越に來て　まだ越馴れぬ我なれや、うたて　寒さの肌に切なる

今よりは、續ぎて　白雪積るらし。道ふみ分けて　誰かとふべき

いにしへにありけむ人の持たりてふ　大みうつはを　我は持ちたり

（水瓶の歌）

人の子の遊ぶを見れば、にはたづみ　流るゝ涙とゞめかねつも

あづさゆみ　春を春とも思ほえず。過ぎにし子らがことを思へば

人の身は習慣ものぞ。子どもらをよく教へてよ。ねぎらひまして
紀の國の高野の奥の古寺に、杉の雫を聞き明しつゝ
福井なる矢垂の橋に來て見れば、雨は降れゝど　日は照れゝども
世の中にまじらぬとにはあらねども、獨り遊びぞ　我はまされる
あしびきの　黒坂山の木の間より洩り來る月を　夜もすがら見む
如何にせば　誠の道にかなはめと　ひとへに思ふ。寢ても　覺めても
いま二日　三日もたちなば、さすたけの　君がみ足も　よくなほらまし
あしびきの　山べに住めば　すべをなみ、樒つみつゝ　今日も暮しつ
大み酒を　三杯五杯たべ醉ひぬ。醉ひて後は、待たでつぎける
夜明くれば、森の下庵　鴉鳴く。今日も　うき世の人の數かも
苗々と　我が呼ぶ聲は、山越えて　また山越えて　谷の裾越え
松の尾の松のあひだを　思ふどちあるきしことは、今も忘れず
ます鏡　手にとり持ちて、今日の日もながめ暮しつ。影と　姿と

我も思ふ。君もしか言ふ。この庭に立てる槻の木　こと古りにけり
うま酒を呑み暮しけり。はらからの　眉白たへに雪の降るまで
天も　水も一つに見ゆる海の上に、浮きて見ゆるは、佐渡の島山
天傳ふ　日はかたぶきぬ。たまぼこの　家路は遠し。袋は重し
里べには、笛や　太鼓の音すなり。深山は、澤に松の音して
わが宿の竹の林をうち越して　吹き來る風の音の、きよさよ
たらちねの　母がみ國と、朝夕に　佐渡の島ねをうち見つるかな
我が宿を　我の　やぶとぞ荒せれば、亂れても鳴く　蟲の聲かも
わが宿の竹の林は　日に千度行きて見れども、あきたらなくに

必しも即興によつてのみ作つたとも言へぬ。だが製作は、多くさうした輕い氣持で、何の心構へなく行はれたものに違ひない。さうして出來たものを、覺え又記しつけておいて、後々までも、心のゆくまゝに手を入れて居たものと見る方が、正しいやうである。今の世の人が考へる

やうな確實性を持たせようと言ふやうな技工でなく、空に浮んで居るやうな調子を完全に捉へようとして、幾度もくり返した改作に違ひない。さうして其が、人に賴まれて、紙に向ふ時、とりわけ行はれたものと思はれる。

かうした、實に浮動するもののやうな調子を具體化しようとする所からこそ、屢わが歌・人の歌の區別が立たなくなつてしまふのである。今まであげて來た類想・類型の外に、まだ澤山其がある。謂はゞ殆、先人の作をまる取りにしたやうなものも出て來る。此は索引の完備して居ない短歌で、而も人口に膾炙せられた歌の多いわが國の短篇文學では、口をついて生れたと信じてゐるものが、思ひがけず古人の作であつたと言つたことは、我・人共にくり返す經驗である。我々の生活に對する感じ方が、既に古い文學によつて規定せられて居り、さうした代表文學が殆、我々の內生活の聲のやうに力强く我々をとりまいてゐる。だから我々の考へも、我々の物言ひも、何かに觸れたと言ふ際は、既に古人の感慨を我が物にしてゐる時である。だから自ら語までが、古人のまゝ、或はほゞ似た形で復活して來る訣である。良寬のやうに、自由な心で、歌の方へ向けたまゝはふり放した態度で作つてゐる時には、其がむら〳〵として

出て來る。普通は、大抵は內にひきしめて、自分の物にしようとせりつめて行くから、暗合は少いのである。

世を厭ふ苔の衣は　いとせまし。かさねば疎し。いざ　ふたりねむ
いそのかみに　旅寢をすれば、いと寒し。苔の衣を我に貸さなむ

此は良寬の作と傳へてゐるだけでも、をかしくなる。遍昭と小町との石上寺（イソノカミ）での贈答として名高過ぎる位のもの。「岩のうへに」が、寺の名の石ノ上になつて居るのも妙だし、「世をそむく」が「世を厭ふ」になつた位の事では暗合ではない。たとひ、口を衝いて自ら生れたとしても、此を又どうして自分の歌だと考へただらう。思ふに、やはり官女の繪と僧の畫に贊を賴まれた時に、古歌を書いたまでであらう。第一かうした贈答を、良寬が一人でふつと作ると言ふことも考へられない。此以外は、譬へば「あるはなく、なきは數そふ世の中に、あはれ　何時まで　我が身なげかむ」が「あはれいづれの日まで」だけを記憶違へした程度だと言へる歌にしても、良

寛が、ふつとある時創作心が、記憶中のあるものに觸れたのだ、と言ふ説明はつく。

其ほど類型以上のものさへあるのである。其はもう、本歌どりの歌と言ふ程度をのり越えてゐる。語の上の類型に止るものを避けて見ても、相當に前型を指摘することが出來る。其で居て、さうした古歌と竝べても、別に生命があるのは、古歌の中の語の用法と違つた形に活して居るからだ。古歌の中に生きてゐる語句の古典的な活力を捉へて來て、新しく自身の生命を活して來た所にあるのだ。古歌の語句から、促された新生命の發動、さうした處に、良寛のやうな態度によつて、自由に現れて來るものの形が見られるのである。さうしてさう言ふ能力のある彼の、語より幾歩か先のものを感受する力を見ることが出來る訣である。

何にしても、良寛の歌に見えた「詩」は、單に歌から出て居るのではない。その漢詩の上における力が出て來たものと見られるのである。

四　明治時代

一　池袋清風

明治十四年の末まで

さみだれの雨のはれ間を吹く風に、樓花散る庭のおもかな

明治十五年中

谷の戸に　雲を殘して霽れにけり。横川の奥の夕立の雨

さま〳〵の雲の姿を　まづ見せて、出で來る月のおもしろきかな

秋の野の草の庵を立ち出でゝ、夕の空をながめつるかな

明治十六年中

くぬぎ原　梢の枯れ葉散りはてゝ、綠にかへる春の暮かな

瀬戸小舟　鼓ならして騒ぐなり。鯨入りけむ。天の橋立

明治十七年中

白たへに梅ぞ散り敷く。小笹原　下根の雪も　いまだ消なくに
つゆばかり散ると思ひし　秋萩の花も　残らずなりにけるかな
雲かゝる杉の梢を底に見て、あやぶくわたる　飛驒のかけはし
なきがらを　なほ目の前に殘しおきて、いかなる國に　君はいにけむ

明治十九年中

長月の長夜も明けて、長崎のみなとに近くなるぞ　うれしき

故郷へ歸る舟のうちにて

明治二十年中

朝な〳〵　立ち出でゝ見れば、白雲の底に聞ゆる谷川の音

比叡の山に避暑しける頃

雨過ぎし松原行けば　からかさに落つる雫の音のすゞしさ

明治二十一年中

見るがうちに　船のともし火かずそひて、神戸の港、日は暮れにけり

明治二十二年中

嬉しくも　神のみ國に、えびかづら　榮ゆる時にあひにけるかな

奉教記念日に寄遺(?)述懐

明治二十三年中

なつかしき朧月夜に、鴨川の柳のかげを　行き還りつゝ
しづが屋の園のもろこし　穂に出でゝ、秋風すゞし。鎌倉の里

をりにふれて

明治二十四年中

春の夜の汽車の窓こそ　かをるなれ。菘(スヾナ)　咲く野を　今や過ぐらむ

をりにふれて

明治二十五年中

大舟のまどより見れば、名も知らぬ離れ小島に　霞たなびく

蜩の鳴きたつ山の　杉むらに、殘る夕日のかげの　さびしさ

むら雀　ねぐらに騒ぐ聲やみて、月こそ出づれ。園の竹むら

いくばくの夢をのせてか　はしるらむ。夜ふけて　汽車の音の聞ゆる

山もとの松のあらしのこゝちして、汽車こそ過ぐれ。朝霧の中に

名も知らぬ高嶺に　雲の歸り來て、日は暮れにけり。旅の山みち

明治二十六年中

山もとのしづが垣ねの花ざかり　麥生の末に見えわたるかな

雨そゝぐ　野なかの森の夕鴉　なく聲寒くなれる秋かな

垣内田に新藁敷きて、しづの子が遊ぶ冬にも　なりにけるかな

枯れ尾花　かげ澄みわたる白川の水の綠の　寒くもあるかな

明治二十七年中

夕月のかげを湛へて、濱川にさし來る汐の音の　すゞしさ

明治二十八年中

蛙まで　疊のうへにあがりけり。田なかの里の五月雨のころ

明治二十九年中

山寺の佛の顏に、蝸牛はひこそのぼれ。五月雨のころ

霜枯れし淺茅が原を　行く水の光るも寒し。冬の夜の月

この川も限りなるらむ。橋越しに　海の白帆の見えそめにけり

明治三十年中

ひとり行く旅の山道　ひぐらしの鳴きたつばかりさびしきはなし

明治三十二年中

山里のやれし障子や　つくろはむ。霜風寒き冬は　來にけり

蕎麥の花　芋の葉枯れし初霜に、大根の綠　目にぞ立ちける

をちこちに　麥蒔くしづの見ゆるかな。山田の原の小春日よりに

霜がれて殘る山べの茄子畠に、風の音寒く　日は暮れにけり

明治三十三年中

富士の嶺は　をり〳〵夢に見つれども、憂き身は　何も幸なかりけり

七月十二日の曉、富士の夢を見て

池袋清風、年三十五の明治十四年以前の舊詠から、歿年明治三十三年、五十四の初秋に至るまでの製作數千首の中から、鎌田正夫さん竝びに井上通泰さんに選拔を賴んで、弟子正宗敦夫さんの出した「かゞしのや集」から、此だけの歌を拔いて見た。

明治の新派和歌運動當時は、清風の名を言ふ人が、其でもあつたのである。併し今になつて見ると、知る人も忘れたやうになり、大凡はもう當時の事を書物の上でばかり測り考へようといふ、次代の人の言説がとり替つてしまつた。此では、池袋氏の名は、書き物の上に現れても、ある必然性が、新派和歌運動史の上には見られなくなつて來るのだ。

我々の心づかなかつたことで、言ひ忘れてはならぬことは、新派短歌が基督教文學の影響を受けてゐたことである。此は、新體詩の方では、既に明らかになつて居ることだが、歌の方には省られなかつたのではないか。新體詩にも、短歌にも古く働いた人の中、大西祝・湯淺吉郎の

如き、又、德富健次郎・北里闌、此等の人々は、京都、同志社を出た人であつた。さうして、池袋清風を指導者として歌を作り初めたのである。「淺瀨の浪」初篇・二篇を見ると、其樣子が知れる。

九月十一日(明治廿六年)、東京なる大西祝より婚禮せし由知らせて、祝をも乞ひければ、

限りなき學びの海の底に入りて、龍の都の妹や　得つらむ

清風自身も、十三年九月京都に上つて、同志社に入學する前に、基督教を知り、新島襄にも會つて居るのである。十四年には、洗禮を受け、翌年、同志社別課神學生となり十八年卒業したと言ふから、本格の信者である。此間、同志社の學生に請はれて和歌を教へた。卒業後は、同志社女學校教員となり、又同志社の圖書掛となつた。明治廿一年、門下の作、自作を選集した「淺瀨の波」を出した。前年から當年にかけて、「和歌概論」を東京日日新聞に、郵便報知新聞には「和歌の略史」を連載した。勿論、時代が時代であるから、此等の論にも多きを望むことは出來なかつた。が、既にある組織を思うてゐる點は、他の人々より遙かに進んでゐたと言へ

る。此は、彼の周圍に、神學や哲學系統の學問に親しむ人々があつた爲であらうと思ふ。清風が、歌論を公にするに少し先つて、大西祝は「和歌に宗教なし」の一文を六合雜誌に載せてゐる。此年には、二三年來、新舊共に頻りに行はれて居た歌壇の議論が、著しく新しい方に向つて居る。若い知識階級の人々が、歌の方角を摸索し初めたのである。

而も、其答へを聊かながら用意して居たのは、彼ばかりであつた。「淺瀨の波」は廿一年に出て居るが、之に載せた歌は其前の製作にかゝるものである。「かゞしのや集」の拔き歌集で見ても、單に平明な桂園派式のものに過ぎないやうに見えようが、此とて、此頃としては、極めて新樣であつたのである。日向(都城)の人だけに、歌風は八田知紀を越しての桂園流であつて、强ひて古典的な樣式を採らず、題材もありふれたもので、人の詠み忘れたものを、事もなげに歌ふと云ふ、心の觸れ方と、詞の出方に、靜かな融合を考へてゐると謂つたものである。さうした點に、新しさを常に盛り出さうとするには、その人の心構へが非常にむつかしくなる。ともすれば、平俗に落ちこんでしまふものである。おなじ八田流の先輩とも見るべき高崎正風その他の歌を見ても、さうした、陷るべき所におち込んでゐるものが多い。さうして其が、明治

年代以降の御歌所風と稱するものに、久しく傳る歌風だつたのである。

江戸の浮世畫師の殆すべてが、晩年において皆救ふべからざる安易平俗な畫風に墮落して、筆力も、描いた支體・容貌も、類型に固定して、感激のないものになつて居る。此は、彼らに先人の畫業に對する理會や、素養がなかつた爲である。其上、何の理論もなく技工のまゝに流して居た故である。所謂舊派短歌も其である。單純な技工、其がどうした質を持つたものとも考へることとなしに、常に乏しい心田の上に耕し〳〵して、遂に土壤を疲らしてしまふやうになつたのである。清風の作物を見ると、平明な歌口を常に湛へ持つて居たことは、まづ彼が常に理論と、若干の學殖を保つて居たに因るのだらう。而も凡晩年まで徐々に新しい方への進みを止めなかつたのは、何よりも注意してよいことだ。此は東京よりも、京阪生活に親しんで居たとは言へ、友人は東京に多く、發表機關も東京に持ち、さうして常に接する者は、當時の知識階級、尖鋭な近代人と思はれて居た耶蘇教徒が多かつた。

外國文學の影響も、當時は、此等の人々から生きて取り入れられた。更に直接には、聖書・聖歌の類が持つ文學質が、若い時代には深い誘きとなつた。此甘美性に囚はれた人々が、新體詩

を多く作つた。從つて短歌を會得すれば、此にも、新文學液を注がうとするのは、當然である。

マリヤ　クリストをはらむ（二十三年）

ゆだや野の淺茅が露に、ひさかたの、月の光りの、やどりけるかな

密室祈禱（三十一年）

妻子だに知らぬ室屋の祈りこそ　神のうくべきまことなりけれ

かう言ふ歌の少いのは、寧、不思議な氣がする位だ。歌の情調が容易に、基督敎の知識によつて動じなかつたからである。だが、全面に變化するよりも、次第に末梢から移つて行くのであつた。其よりももつと大きなことは、歌その物の上にあつた。清風の歌自體が變る事よりも、我々の短歌が多少づつ、違つた方向を暗示せられて、最初の一歩は其から踏み出たことである。即基督敎徒による新しい文學要求が、新體詩を今樣や和讃から拾ひ上げた如く、歌をも歌から探り出ようとした。だが歌はもつと、我々にとつては、頑な古典であつた。だから、表面耶

蘇敎文學の影響もないやうな風な靜けさを保ちつゝ、其でも變化は、此邊から起つて來たと見るべきである。

其は新派短歌の間に流れてゐた一筋の地下水であつた。後年「明星」派の歌が、星を詠じ、菫に歎くものとせられるほど、西洋臭味ある題材を專ら擇ぶやうになつたのは、源頭がこゝにあつた訣である。明星以前に顯るべきものが、久しく隱れてゐたのは、與謝野鐵幹改革を宣した時、「忘國の音」を以て、當時の歌を罵つたから、さうして彼の生活も亦、朝鮮に漂遊するに適する氣を負うた傾きになつて居たから、姑らく形を潛めて居たものと言ふことが出來る。明星では、耶蘇文學に替へるに希臘・羅馬神話又は、多くの「花語」の類を以てした。意識して、さうした訣ではない。だが、どうしても現れる筈のものの、現れて來たことに替りはないのである。

清風は和歌に立ちながら、新體詩をも論じた。世間では、新體詩を以て和歌に代ふべしとする者が多かつた。それの對抗策として、短歌の兄弟樣式たる長歌を復活させようとするもの、今樣を興さうとするものなどがあつた。其間に極めて自然に、和歌改良論が起つて來た。さうし

て其實際運動を、疾くから稍自覺して試みて居たのは、清風位のものであつた。

若し一つの構圖を積つて見る事が許されるなら、當時の歌壇を三つに分けて見たい。歌人と言はれた、單に文學としての短歌を作る人々、其から歌人といふ職業に對して常に蔑視の目を向けて居た國學或は和學の學者、其外に此兩者に亙つて居た歌人で學者なる者、此三つであつた。一は、歌に遊ぶ弟子を擁して、歌の作法を師範して居た者である。此人々の筋は、御歌所にある人々に續いて居る。だから學者系統の人は、其中から落伍して行つた。二は、古學を學び教へると共に歌を作る者であるから、歌風については、多く圓滿な理會があつて、偏することが尠かつた。其でも萬葉を祖述する者、新古今に據る者、各時代の歌の融合したものを本質に近いものと見て、之を作らうとしたものなどがあつたが、作物から見れば、必しも單なる歌人とさして違ひのない者も多かつた。だが態度としては、折れ合はぬ者があつた。だから理論としては國學者式で、學に準據を持たぬものは、頭から否定する。其志を得たものは、大學講師その他の官職について居たが、民間にある者は、とかく古來の世間を警めると謂つた批判癖が出て、歌よみの歌などは、皆反則として是認せない。第三の者は、市井に居て歌よみである所の

町學者（マチガクシヤ）。同時に學問もして居る。學と歌と兩方を以て世渡りぐさとしてゐる。だが時を得れば歌道の顯職にもなり上り、學者の權威ともなれようと言ふ望みを棄てなかつた人である。此は兩方に繫つてゐるやうで、同時に兩方から目を側められて、唯歌を作る啓蒙書や、和文學の手ほどきの註釋類を多く出版した。かう云ふ三種の人々の中、最氣むつかしい第二の學者仲間が、新しい歌の運動をうけ容れる筈はない。尤、其人々の立ち場としては、眞淵以後のある理想として、世間の歌を萬葉集化する責任も負つてゐる訣だが、まだ其に氣づくには到つては居なかつた。

第一の歌よみ階級こそ、別に其持つ文學に操守を感じない。唯、其等の人の與へられたものと反りのあはぬ知識風なものや、學問式なものは、文學としてうけ容れる事が出來なかつた。さう言ふ點では、低い程度乍ら、文學的に敏感な所があつた。だから、第二の者を受け容れることとは、此亦出來なかつた。唯、彼等の知識と趣味性に受け容れられる程度の新傾向は、景樹以來の標幟でもあつたから、自由にとり込まれた。

第三の町學者は、世間上下の好尚の向ふ所を敏捷に見てとるから、勿論第一階級の人々の認め

たものを、直に世に行はれるものとして、新興の歌人を棄てる事はしなかつた。だから、明治代を通じて、新派短歌の新人は此人々の間を氣易いようすがとして身を寄せたものである。若い時代は、常にこちたい學問人の門から生れなかつた。何時も安易な中から、新しい言立(コトダ)てをして出て來る。新派短歌もまづ、桂園の風を汲んだものから、出て來たのは、後の姿から見れば、眞に不思議とも言へる形であつた。

一方は、愚庵も行誠も、尙絅—此人の作物は添刪が多く加へられてゐるのでないかと思はれる—も隱れて相當な爲事をしてゐる。此より數年前既に「志濃夫廼舍歌集」も出「僧良寛歌集」も板になつて居た。然るに、時は、其とは沒交渉に、もつと遲れた發足點から、足を踏み出しかけて居た。

明治廿年は、歐化の風の極點に達した時と、人々から見られてゐる。此年の前後を境として、次第に日本式な運動が著しくなり、民族性格を失ふことを憂ふる思ひが深くなつて來た。さうして其を唱導したのは、當然だが、其に適當な人々と見える國學者がした。此が併し必しも適當ではなかつた。十九年七月にはじまつた大八洲學會及び其に近似した國學者和學者等の運動

が其であり、古典短歌が發表せられてゐる。

稍遲れて同じ年、東洋學會が設立せられて、日本以外に、支那印度の優れた文化があつて、西洋の學風・思想に對抗するに足ることを悟らしめて、時勢の大波を捲き返さうとした。かう言ふ二つの學會の雜誌には、和歌に關する論文が多く載つた。さうした雜誌の少かつた時代だけに、議論や作物が、影響を與へることも多かつた訣である。

反動運動が、かう言ふ形において起つて來たのは、既に西洋文化をある點まで理會し、或は其を全然無視することの無謀なことだといふことが訣つて來たからである。其と共に、國粹論をするにしても、西洋學の基礎の上に立たうとする傾向を示して來てゐる。さうして、次第に論者の年齢は若くなつて來た。二十年代の和文論の中心が、新しい古典講習科出の和文教育者の手に移つて行つた觀がある。落合直文・小中村義象・萩野由之・佐佐木信綱等が其であつた。

西洋文學に對する何らかの理會が、やはり新しい短歌運動にも、必要であつた。而も短歌が、古典文學である性質上、其とり入れ方に問題がある。が、文學の本質と、文學者の生活との關聯は、理論よりも、情調の上で自ら解決のつく時がある。表面何の他奇ないやうな桂園風の歌

を作つた清風が、其でも周圍に接する形において、其感じ方において、又とり入れ方において、柔和な歌口の間に、自ら耶蘇教文學のあまさが沁み出させて來てゐるのも認められよう。

比叡の山に避暑しける頃

ふけ行けば、松のあらしも吹きやみて、さやかに響く谷川の水　二十年

くま鷹の聲ものすごき　大比叡の谷間に響く　水の音かな

蜑が屋の旅寢の床に　響くなり。秋をよせ來る由井の浦波　立秋の日、鎌倉にて—廿三年

富士の嶺の雪よりおろす秋風の　涼しくかよふ汽車のまどかな　鎌倉より興津へ行く—同年

此等の歌、從來の歌の見方で見るのが當然で、別の見方を要する程、特殊性が出て居ない。だが當時は、作者自身にも、讀者にも新しい生活樣式なる避暑逗留と謂つた氣分が、行間に糾ひ

こまれて感じて居たのである。かうしたものが徹底して、作者の懷いたもの、讀者の感じるものが、どうしても歌の形の約束以上に現れて來なければならないのである。

清風の歌は、今日「かゝしのや集」三百首足らずの外の數千首は一纏めに見るのは、ちよつと困難である。正宗さんの選擇を託せられた鎌田・井上兩氏は、その標準を明治三十年代の御歌所風の歌口において居られるだらうから、曾ては贊同して居られたものも、又全然自由な詠み口である歌も、捨てられない限りはない。又さう思ふのが當然なのだから、「かゝしのや集」ばかりによつて、池袋清風の新傾向を見ようとするのは、最初から無理が含まれてゐる、と思はねばなるまい。だがたとへば、さうした中から、亦極めて平俗なものをとり出して見ても、

信者は相愛せよといふ教への心を

この世より　天のみなとをさして行く乘り合ひ船は、たのしからなむ　三十一年

新　年

忘れたる友のはがきも　見ゆるかな。年のはじめは、これぞうれしき

三十二年

乘り合ひ船などは口語臭が堪へられない。だが、作者にはある異樣の感激があり、語調に特殊なしなひを出したものに違ひない。これぞうれしきは、凡庸人の感激を凡庸に發想する口語式の詠歎だが、これぞに特殊な新しい感覺を示さうとしてゐる所も、考へられないではない。何にしても、はがきなどが新題として、あるぎごちなさと、其から來る一種の遊戯滿足、さうしたものが喜ばれて居た時代である。だが此時は、既に翌年に與謝野氏の明星發行を控へて居る時代であつた。だから、歌にも自ら新しい生活氣分が出てゐる。後年、石川啄木は、此にある感傷を寓して表してゐる。

正月も　四日になりて、彼の人の　年に一度のはがきも　來にけり

（悲しき玩具）

「嬉しき」と淡く觸れ流したのに、對して、十數年經ると、別の表情が行はれて來た。其を單なる嬉しさでない。ほのかな寂しさだと解してゐるのが自然主義以後の文學たる所以である。

鐵幹・子規以前の時代の動きは、まづ清新を掴まうとするのであつた。さうして、さう言ふ動きの一番著しい代表者として、私は清風をとり出して見ようと思つたのである。彼においてこそ、作物もさうした形をはつきり示して居る。其生活を見ても、時代性を見ることが出來る。さうして、新文學の、從來の日本文學と違ふ點、理論を持つて出て來るといふ所も、此人において、まづ〳〵一等はつきりしてゐると言へるのである。

二　新派運動

世態の上に時の動きが、あんまりあらゆる點で一致して現れて來るものと見る考へ方は、適切であればあるだけに、不自然である。だが、雲行きに似て、一方へ〳〵と謂つた偏りが、明治の短歌の上にも見られるのは、事實である。

明治も十年度の末までは、まづ舊態が自ら變り目に向つて居た時と見られる。舊時代の生活樣式が殘り乍ら、でも新しい方角を摸索して行つた社會の有樣と、ぴつたり竝び進んでゐたのである。と言ふよりも、歌そのものも、亦さうした變化を欲した情勢の一つの條件だつた、と見る方が、正しいのだ。

併し新しい形を捉へるまでの足掻きは、決して單調ではなかつた。舊制度が廢せられて、新しい組織が行はれるかと思ふと、又元の形にひき戻されて來る。

太政官と內閣との關係が一進一退して變り、個々の事で言つても、八劍社を宮號に復したり、

早く廢した門跡の稱を一部に許し又、すべて舊稱を復したりして居るやうな例は、幾らでも見える。進んで見ては其缺陷が知れて來たり、情の忍び難いものがあつたりするのである。だがさう言ふ繰り返しの間に、二三歩進んでは一二歩退き、又進んで絕えず時の要望に調節して合せて行かうとすることは止めなかつた。

其中途に、新しい形が多く殘る。だが此ばかりでは、飛躍が容易でないと言ふ所から、一方激しい促進運動が行はれる。と同時に、一方絕えず古い均整をとり戻さうとする復古黨の牽制力が加つて來る。明治七年、板垣退助等の選議院設立建白があり、翌年には立志社が起され、十四年には板垣の自由黨が結ばれてゐる。十八年頃には、その黨の政治運動が激化し、二十年、彼の榮爵拜辭となる。又引き續いて、時弊十餘條の封事を上り、後却下された。此板垣の動きは頗有につくものだが、封事建白の件に關しては、五月に勝安芳の時弊二十一條の建白があり、七月に亦、谷干城の意見書が出され、板垣のは八月の事になつて居る。さうして、此等三通の上書建言が、促進にも保守にも相關つて居た事を思ふと、此時代の世間が考へられるではないか。自由黨・改進黨・帝政黨・後藤象二郎の大同團結が互に絡みあつて、亦上に述べたやうな

姿を見せて居る。大同團結の前身とも見るべき丁未倶樂部の初寄り合ひをした二十年十月三日には、國學者・音義論者だつた堀秀成が死んでゐる。其翌日が板垣の封事の却下せられた日である。偶然ながら、時の動きの、色々な姿を包んでをる事を思はせてゐる。

此年二月には、德富猪一郎さんの「國民の友」が出た。一年經つた四月に、三宅雪嶺さん等の「日本人」が對抗して發行せられたのも、國粹主義者には、最早堪へ難い世の中だつたのだ。日々の興奮を殘して過ぎる新聞よりも、更に長い印象を留める雜誌の上に歐化・國粹の爭ひを決定しようとしたのである。而も其が單なる政治・巷談中心の新聞としての外に、今一つ明治文學を形づくる側に、有力な働きとなつたのは、考へなければならぬ。

此二つの雜誌發行の間に横つた一年こそ、激しい流れが、民族精神の上に筋を引いて過ぎた時であつた。十二月廿六日から廿八日に亙つて、凡六百人の政論家・壯士等を、宮城の三里以外に放つと言ふ保安條例が出動したのである。かうなり到つたのも、條約改正延期に對する憤り、言論集會の自由に對する熱望・地租輕減の要求の三問題を中心にしての國中有志の運動が、運動其ものの意義を知り初めて來た所にあつたのである。

而も國粹・民權兩論者ともに、其因る所は行き止らぬ歐化に問題が在つたのである。が、其中心に動いてゐたものは、强く此時代に生きようとする心だつたのである。

此改革の氣運に乘つて、恐らく正反對の立ち場にある筈の、國學・國文學の學者文人も、自ら今までの研究や作物に、生きた時代の力をとりこまうと努めたのである。表面新しい文藝運動に反對した人たちにも、力强く拒否しようとする力その物の現れ方が、變つて來た訣である。

謂はゞ、學者の間にまだたぎつて居た國學者の遺り所ない血が、此時勢にのつてたけり立つて來たものと見られよう。だから、明治の短歌の革新も、さう言ふ歌に對して情熱を寄せた評論の側から、見て行く必要がある。

明治九年に、蓮月歌集（海人の刈藻は早く出版せられてゐた。）、十一年に志濃夫廼舍歌集が出、翌年、僧良寛歌集が出た。此とて出來るだけ先人の名作を傳へる外に、或はおのれ〳〵の江戸期傳來の遊戯三昧を、わりに狹い世間に擴める位の考へしかなかつたのだ。新しい活版技術をすら利用するものは少かつた。だから大體において、江戸の歌書と何の擇ぶ所のない歌集・歌書・作法書の刊行に止つて居た。個人の歌集としては、現存の人のにも、相當よいものも出た

が、多くは故人の追善の爲のであつた。

維新殉難の志士の歌を集めたものも相當に出たが、凡、事もない幕末の歌壇とおなじやうな平靜に還つて、時々明治或は開化など言ふ所謂新風を意味するやうな名稱のものが、後から〳〵盡きずに出た。十年度位からが、殊にさうした色彩の強いものの出た訣は、世間の見極めがついて、文人らしい安易に就かうとした爲であらう。十一年の明治花月歌集（下澤保躬）開化新題歌集（大久保忠保）明治百人一首（岡田霞船）、十三年には、開化新題歌集は二篇を出してゐる。又、明治開化和歌集（佐佐木弘綱）、翌年には同じ人の開化新題和歌梯すら出てゐる。つまり歌に遊ぶだけの餘裕が世間に出て來たのである。此間に最早く出て、最長續きしたのは、明治九年に第一編を出し、三十三年に第九編を出した橘東世子・橘道守編纂の明治歌集である。此も二十年の第五編位で、年月を隔てゝ續篇を出した點からも見られる如く、その微かな役目すら過ぎ去つたのである。

かう言ふ間に、古い作法集の飜刻が次第に現れて來、遂には新しい物が目立つやうになつて來た。十二年に「雅言解」、十三年に「增補冠辭例」、十四年に增補「和歌麓の塵」、十七年に「和

歌入門」、「布留の山婦美」の飜刻が出た。明治十九年になつて初めて現れた佐佐木弘綱の詠歌自在は、此種のものでは新樣式を創り出したものでもあり、同時に彼をして歌道の師範者としての隱然たる勢力をなさしめたのである。さうして彼の事業は、彼の助力者であり、同時に後繼者であつた信綱氏の努力の多かつたのは固より二十四年になつて、落合直文の「新選歌典」が出て、右の書を凌ぐ出來榮えを見せた。翌年佐佐木信綱氏の「歌の塵」が出、又三十年に同じ人の「詠歌辭典」が出て、麓の塵・布留の山婦美系統の物では、到達すべき最高い點に行きついたと謂へる。

かうした啓蒙書の出版せられた一方に、もつと本格的な歌の本然の姿を知らうとする方面へ進んで居た動きを知らねばならぬ。

明治十五年に、皇典講究所竝びに分所が、東京と府縣々々に置かれた。明治維新の精神方面を分擔した國學者の事業は、扨成つて見れば認められざるに等しいとり扱ひしか受けて居なかつた。矢野玄道は「橿原の宮に還ると思ひしは、あらぬ夢にて　ありけるものを」と歎息した。

國學者は、官途にありつきを得たものの外は、多少とも皆かうした慷慨を懷かないものはなか

つた。其と今一つ、自分らの學統傳來の理想と反した歐化主義の時勢の波が、とめどなく氾濫するやうに見えた。此立ち場に立つての社會批評が、國學者の間には明治末年まで持續せられる癖を作つた。歌の上で見れば、後年、林甕臣が自らも歌は作り乍ら、頻りに遊戯文學として短歌に遊ぶ徒を罵つたのは、其著しい姿である。二十五年、「歌よむわざを學生にもとく」「戀歌は詠むべからず」などを發表したのは、「國文學」に關係のない國學者一部の自由な意見の吐露であつた。かうした國學者の氣風は、平田篤胤以後の月花の風流を恥ぢた國學者の傳統の傾きを示したものだつたにしても、國學の理想がかくの如く蹂躙せられても、尙屑々たる歌文に遊ぶのが樂しいのかと言ふ怒りだつたのである。何等批判なく新政の註釋づけをし乍ら、文學御用掛或は大學講師の類にとり立てられた者は、多くは傳統から言へば遙かに傍流にあるものであつた。又官邊に緣故を結ばずとも、江戸の歌人俳諧師がしたやうに、歌道の師範として、何の主義もなく文學を弄ぶもの、すべてが國學のある方角から見れば、末流邪道としか見えなかつたのであらう。

全體として世を憤る人・怒りを主として國學者及び新興の國文學者に向けようとする者の出て

來るのも、尤な時勢であつた。

皇典講究所が出來、其外國學者の滿悅を促しさうな事は、ちら〳〵實現せられ出した。丸山作良及び矢野玄道などが、畫提灯を提げて歩いたり、「先皇遺民」などと名のつたりするやうな煩悶時代の續いた結果だが、當時の西洋文化をとりこまうとする熱意は、更に强くもあり、不斷でもあつた。明治廿年は、其小さな頂きに達した時と思はれる。世間で謂ふ、鹿鳴館の舞踏會が行はれ、又攻擊せられ出した此年の五月には、玄道が世を憤り乍ら死んでゐる。

國學者が持ち越した學問も、歷史典故に關するものか、又末流餘技ともある點では見做された短歌に與るものでない限りは、用ゐられる事が少かつた。

廿年はちやうど、其色々な汐の八百合（やおあひ）に流れ合うたやうに見える時であつた。內的の情熱が出口を求めて居た最中であるし、又無爲に苦んだ學徒がはけ口を、知らず〳〵に探してもゐた。其に文運は旣に歌の上にも興らうとしてゐる。其に外的には、政治が改革運動・現狀破却の頂上に糶りつめてゐる時であつた。前年來の文壇と比べると、今日において著しく見られるのは、二十年廿一年に亙つての著しい文學活動である。

追つて廿三年以後、國學院・東京大學附屬古典講習科の開設と言ふ事實を控へてゐるので、其先觸れが、自ら出て來るのも、當然である。此より先十七年には、明治・大正に亙つて、御歌所派の强敵として働き續けるやうになつた海上胤平が、「東京大家十四家集評論」を出版してゐる。胤平は劍客出で、法官でもあつたから、純粹の國學者とは言ひにくいが、氣概の激しい所は、國學者と通じる所が、餘計にあつた筈である。歌と國學とを加納諸平に學んでゐるから、まづ紀伊本居派の系統である。しかく彼自身自負してゐたからでもあらう。其論難の癖は年を逐うて激しくなつて來た。十八年には、鈴木弘恭の「…十四家集評論辯」が出てゐる。「十四家集」其物は、十六年に出て居た。此間一年づつ經過してゐるのだから、單行本とは言へ、時勢の悠々たることを語つてゐる。時代の動きが激しくなつて來たといつても此程度だつたのだ。二十年に先だつ二三年は、雜誌類の頻發した時代で、其が必しも政治雜誌ばかりではなかつた。「國民の友」が政治雜誌以外にも領域を開いて成功して來た所から、社會改良又、基督教式教養を與へようとの意味のものが出て來た。さうして其が最濃厚に、文學領域に切り入つて來た。本派本願寺派の反省會雜誌が出たのも、其反動であり、又影響を反面に露してゐる。「以良部

女」が七月に出た。女學雜誌（十八年）などの影響はあるが、國民の友の反映を多く含んで居る。廿一年には、「少年園」が出た。青年文學雜誌の源頭に立つてゐるものと言へる。此が「文庫」の前身である。

今までは單行本の時代で、此からは雜誌によつて、文學及び文學論が發表せられることになつて來るのである。だから、應酬も、反響も、速かに現れて來るやうになつた。其と共に、新聞が明治初年の漢文もどきや、雜誌に出るやうな戯作狂文の半遊戯文章をも載せるやうになつて、書かれたものの反應は、一層敏活に起つて來ることとなつた。

だが其等は、外的の原因であつて、內的には、新しさを欲する、現狀に對する辛い批判を行ふ改革運動の影響と見ねばならない。其ほど急にいきり立つて、皆いら〳〵と議論をしはじめたのである。

西洋主義に立つて而も、之を民人に施かうと謂つた位置に居た末松謙澄は、後年まで、文學美術の飜譯論を發表してゐたが、若し夙く、大學や雜誌に立ち場を持つ事に氣づいて居たら、或は、坪內逍遙・森鷗外に似た爲事はして居たかも知れない。彼の「歌樂論」を東京日日新聞に

出したのは明治十七年であつた。彼だけが特別な位置に立つてゐる如く、此後も暫らく、彼の後を尾いて來るものがなかつた。

亂平同門の先輩飯田年平は—十九年歿—まだ健在で、石園歌話大八洲學會雜誌に前年以來出してゐる。其同じ誌上で、旗野餘太郎（櫻坪？）が、「和歌には韻ありやなしやの疑」を書いて居る。此にも直に、相當の反響があり、後年まで問題を持ち越した。古典科の小中村義象・萩野由之の「國學和歌改良論」が單行せられ、其中の萩野氏の和歌改良論が、最注意を呼んだ。之に對して、廿一年の初頭多くの論評が出た。林甕臣が三月になつて、「言文一致歌」を東洋學會雜誌に出したのも、かうした時勢の現れで、若し短歌の本質に叶うた爲事だつたら、可なりの大事業となつた筈である。彼にはかうした飛躍が特色であつて、而も尋常の事であつた。中年から彼は英國公使館に出入して、さとう公使を敎へた。其爲、晩年まで其好意を受けて居たのである。進取と頑守と兩方の心理を備へてゐた人だ。此年になつて、東京日日（六月—七月）に「和歌概論」を連載した池袋淸風は、五月に、自歌及び門下の歌を集めた前述の「淺瀨の波」を出した。又八月には「和歌の略史」を郵便報知に連載した。彼は此後十年立つた三十二年に

歿した。其年は、新派短歌運動の本格式になつた年であつた。池袋氏の說以前に短歌について新意見は出なかつた訣ではないが、纏つた意見としては、此人を最初とせねばならぬ。當時としては、組織立つた研究をして居て、此後も古代中世の短歌に對して、歷史基礎を築かうとする熱意を、數多の論文に示してゐる。

萩野由之は、古典科出では、最强靱な學問素質と、冷靜とを持つた人であつた。落合・小中村（池邊）兩氏と合同で多くの爲事をしたが、素質が違つて居る。併し此頃は若かつた。文學運動にも興味を持たずに居られなかつたのである。北邊佐渡島から來た人の素朴と、天禀の聰明で、今の歌が歷史の上で、どう言ふ位置をうろついて居る、と言ふ事位は、見透された人である。如何なる歌が將來出て來るかは、苦しまれ作られての上の事である。又此人後來の業蹟で見ると、其方面は無理であつたと見てよい。唯過去と照し合せることが、即決式に出來た人なのであらう。公表したもの、私的のものにも、和歌に關した書き物は相應にあつた。尙翌廿二年「和歌及び新體詩を論ず」（十二月）が出た。

長歌は、在來短歌ばかりで押して來てゐた長い時代の後、明治に入つて、實はもつと自由に長

い思想の陳べられる樣式が望まれて居た。ところへ、西洋詩の飜譯などが、ぼつ〳〵見え初めたので、新しい刺戟を受けたのである。

江戸時代から長歌製作が頻りに奬勵せられてゐたのが、こゝに芽を吹かうとして來た訣だ。夙く十三年に、「歌道本義神風の伊勢の海」が發行せられた。著者村山守雄、此書は昭和に入つて、子、村山龍平の手で再版を出した。十九年には、「露園長歌集」を出し、二十年には「明治長歌集をつくらむの主意」と言ふ論を、大八洲學會雜誌に出してゐる。さうして廿一年には、「明治長歌集」を出して居る。

此廿一年には、國民の友に德富蘇峰さんが「新體詩」を論じた。長歌に對しての近代風な、漢詩とも違ふものを標榜したのだが、恐らく此頃が使ひ初めであらう。名としては一時的の物だつたが、長く用ゐられるやうになつた。

短歌長歌共に、何となく舊風では慊らぬものが感じられて來て、之を處置しようと言ふ時期になつたのである。だから、末松謙澄以下の論皆、長歌新體詩にも亙つてゐるのである。

「國民の友」から宮崎湖處子等の出たのも理由のあつたことだ。井上通泰さんは「新日本詩人の

評」を書いてゐる。單に桂園の歌にばかり趣かなかつた時代だつたのだ。同年同月「長歌改良論」を佐佐木弘綱が發表した。海上氏は之に對しても、翌年四月「長歌改良辯駁」を出板してゐる。此二つは、當時としては實行價値のあつた論である。廿二年になつて、池袋清風が「新體詩批評」を續け、森鷗外が之に應酬した。

こんな間に、短歌の活路を、新しく同じ徑を踏み返すことによつて見出さうとしたのが、井上通泰さんで、新しい立ち場から御歌所派先輩たちの本領を吟味した訣である。「香川景樹の傳」を書いた。その後柵草紙に「桂園叢話」の類を續載して、廿七年に及んで居る。此年は新派和歌が、既に誕生しようとしてゐる訣だ。「桂園叢話」の三十回に亙る間に、第八以下第十七まで（廿四年八月—廿五年十二月）は、松岡國男の名で發表してゐられる。新體詩に一つの傾向を開かれた、後年の柳田國男先生も亦、桂園の作物について、新しい道を見出さうとして居られるのである。

廿一年から廿二年に亙つた內田周平氏（遠湖）の「詩人は國語を以て歌はざるべからず」の論は、漢文學と獨文學に素養のあつた人だけに、書くことにはこくがあつた。此などとそ、眞の

自覺を以て書かれたものであると謂へる。直接には影響を與へなかつたにしても、新派短歌の運動にも早く、印象してゐると見られよう。

明治の短歌革新の一つの元標のやうになつた萬葉集註釋事業は、江戸の國學者傳來の考へ方で、極めて難義な、而も極めて重大な國家事業のやうに思はれて居た。明治九年十二月七日、(文學御用掛)三條西季知・高崎正風建白して、萬葉集註解書を撰らるべきことを上進し、廿六日、宮內省より、萬葉註疏編纂を近藤芳樹等に命ぜられた。此年、島木赤彥が生れてゐるのも、偶然を超えたものを感じさせられる。十二年に至つて、土佐人鹿持雅澄遺稿萬葉集古義の大作のあることが訣つて、之を出すことになつた。九月十六日、編纂は中止せられた。十二月になつて、新しく萬葉集古義校正の事業が初まつた。其が十四年たつて、二十六年に刊行せられた。木板大字であつたのを、三十一年、吉川半七に出版を許すことになつて、三十卷本が出來たのである。

この廿二年には、「萬葉集美夫君志」初卷が出、又おなじ作者—木村正辭氏—の萬葉集書目が出來た。前年既に書目提要が出てゐる。正辭は、萬葉學の興隆するまで、江戸以來の研究方針を

持ち續けた人と言ふべきであるが、歌は、萬葉が心に觸れて居ないことを示してゐる。つまり學問と文學—もつと廣く言へば生活全面に、知識と感情とが別々に働くことを、何とも思はなかつた舊時の學者歌人の態度を露に見せてゐる訣だ。さう言へば、雅澄ほど、萬葉を敬愛した學者でも、其「山齋集」に收めた歌は、萬葉十七卷以下の風に出て居ない位である。

廿三年頃からぽつ〳〵萬葉に關する文章が見え初める。正辭氏の文は勿論、源實朝論(小中村義象)が出た。四月、日本文學全書が出、十月初めて、日本歌學全書が出た。此最初からの計畫として萬葉集を收めることになつて居た。萬葉の出たのは、翌年九月以後十一月に亙つて居る。さうして此年で最大きな事は、三上參次の日本文學史の出板せられたことである。こゝで、從來木板活字本或は「略解」稀に「考」などに據つて見ることの出來た萬葉集は、一冊廿五錢すべて七十五錢を拂へば、讀むことが出來るやうになり、簡明な頭註もついてゐて、念書人を喜ばしたこと一通りではない。此意味において、弘綱父子の萬葉普及の功勞は記憶せらるべきだ。

雜誌の執筆者の匿名の者は、今日もはや推察出來ぬのが多い。東洋學會雜誌に、七八月に亙つ

て白手伊普の「將來の國歌」の如きも、其である。注意すべき書き物だが、「知らで言ふ」を
綴つた戯名が、同時に、西洋らしい感じで、興を引く。
この頃には、既に新體詩には、宮崎湖處子が出、又國木田獨歩も出ようとして居たが、歌には
まだ一人の眞の新しい作物を出すものがなかつた。其は其訣で、明治の小説が江戸の戯作と殆
絶縁した形で、世の中に出て來たと同じ徑路で、新體詩が出て來、其が段々文學式な内容を深
めようとする時であつた。だから前々から數人の長歌論者が立つて、新體詩を日本式なものに
引き戻さうとしたのであつた。東京大學を出た新しい文學士和田萬吉が「短歌を排して長歌を
興すべし」と言つたのが、其議論としては進み過ぎのものだつたらう。之にも反對が多かつた。
和田氏が頻りに「短歌排斥長歌振起」の論を唱へたのも、此年の注意すべき事件だ。
前に述べたやうに、一概に國文學系統の人々と謂つても大體三通りの違ひがあつた。其が學校
出の人たちを加へた爲、ふり合ひを替へて來た。純粋の國學出のもの、國學者の範圍にあり乍
ら歌ふ時には狂體などにも足をふみ入れたもの、其から新時代の國文學研究者、此三つの對立
は久しく續き、中でも初めの二つは、世間では其ほど目立たずに居たが、内らではよほどの差

があり、互に少しの差違をきびしく守つて、一つは道義の城に立て籠り、他は專ら文雅の流れ
を進んで、自然世間との交渉の多い書物を出して行つた。大體講究所・國學院及び國學院にす
ら容れられない激しい慷慨を懷いてゐた人々、今一方は類題歌集や作歌法などを頻りに出し、
多くの文學上の弟子を取つて世過ぎをした町學者である。新しい國文學の人々は、帝國大學の
國文科を出て、啓蒙時代の哲學や、博言學や、修辭學や、さうしたものを學んで、其處にまだ、
前代以來の講義を續けた講師たちの説く所との調和が完全に見出されなかつた時代である。而
も此派は極最近まで大體において、文學を論じる事深くなつて行つたけれど、自らの國文學を
創作することが少かつた。理論は進んだが作物のない人々は、併し此人々だけではなく、全體
としても國學國文學者には多かつた。殊に明治の文學は、かう言ふ人々以外の、唯の文學者又
は享樂風に文學を扱ふ他の學者などによつて、推し進められて來たのも事實である。
此間に古典科を出た落合・小中村等の國文學者が、純文學でも、純國學でもない間の態度乍ら、
した爲事は注目せられなければならぬ。先に述べた日本文學全書廿四卷が計畫せられて、多く
の流布本が、活版になつたのである。

三正岡子規

板伯入閣

自由よ。汝はもろともに
轗軻不遇のはたとせを
過せし友を失ひき。
僞り多き其友は
汝を欺き、束縛の
奴隷と　汝は賣られけり。
あはれよ　自由。しかはあれ
安かれ。汝を繫ぎたる

鐵の鎖は、誠ある
神に解かれむ。國民は
汝を助けむ。あゝ自由。
鴉の頭白くなる
日を賴むとも、なか〳〵に
賴むべからず英雄は。

花守りの花にそむきし怨みかな　——子規

時事偶感

ふぢかつら　力に立てる板垣は、柱の朽ちししるしなりけり

——池袋清風

詩形の性質上、其でも新體詩の方には、若干の文學味が受けとれる。歌の方は、如何にも適當な表現法が見出されないで、むき出しに歌つたと言ふ處が見える。明治二十九年四月、自由黨

總理板垣退助が、伊藤博文内閣の内務大臣となり、黨總理を辭したことで、世論を湧き立たした當時のものである。いづれも、此事件について、世の俗論以上に出た見識を見せては居ない。新體詩は、三十年正月、前年の大小事件を回顧した作物中の一つである。今日傳る子規の詩は、廿九年の物が最古い。其中の一つ「四季」は、當時としては、野心作である。天上と下界とを對照して、春夏秋冬を描寫して行く。其間に出て來る男神女神は大體において、二十六七年「文學界」などに據る詩人たちのする想像と似たものであるが、著しく現實的であり、又西洋式の神でもなく、日本式に傾かうとして居る。だがその「冬」の篇になると、後の成熟した時代の泣菫を思はせる内容を持つて居る。さうして、其最終の聯

風の音をも　忍びつゝ、　靜かによりて　恐る〳〵、　男神をとめを　抱き
起し、　つめたき脣　青き頰に　心をこめて　接吻す。　やがてぞ男神　立
ち去れば、　少女は　がばと倒れけり。

空想の乏しい表現である。が一方、かうした材料。此が子規かと驚かれる程である。健康な精神を立てとほして居た人とは見えない。かうしたところから見れば、晩年の「佐保神の別れかなしも」の類の女神を扱つたのは、やはり西洋臭味を離れてゐないのだらう。子規にも初めには、新詩社と通じる神話式構想の、あつたことが思はれる。廿九年は、はじめて公然と、詩其も長篇を、十篇以上物して居るが、短歌は匿名でばかり發表したか、其とも制作欲が起らなかつたか、表面傳らない。廿八年の分に溯つて見る。

陣中日記のうち

かへらじと　かけてぞ誓ふ。あづさゆみ　矢立たばさみ　かどです。　我は
見わたせば、もろこしかけて　舟もなし。　霞につゞく春の海原

船の中にてよめる歌

舟にして　家やはいづく。わたつみの見ゆる限りは、見るものなしも

冬の歌よめる中に

武藏野を　われ行き居れば、上つ毛や　赤城の山に、雪ふれる見ゆ
あり明けの二十日の月の　はら〳〵としぐれて消ゆる　杉のむら立ち
古葉みな落ちて　ものなき梢より　星吹き散らす　木枯しの風

「かへらじと」の歌は、竹の里歌に屢見える所の――一時は子規の本格調と解せられた事もある萬葉ぶりによつた誹諧味である。此がおなじ日本新聞に關係あり、子規の門下にもなつた坂井久良岐のへなぶり調に傾いて行つたのである。我々は、かうした歌に、子規の韜晦趣味を見る。さうして其は、過去の隱者文學と通じるものであることも考へる。決して狂歌ではないのである。彼は短歌の上にもあつくるしい抒情を避けようとし、又歌人に對して、ある優越感を示し、同時に溺沒しきつて居ないものを見せようとするきほひが出て居るのではないかと思ふ。だが後には、かうした歌口には獨得の感覺を、自らも持ち、人も氣がつくやうになつて、語句の上に一種の擬古態度、と見えるものとなつて來た。

ていぶるの高脚机・集配人（フミクバリビト）・新聞紙（ヒゼリブミ）など言ふ類は、單にへうきんな物言ひだけではなくなつ

てゐることを思はねばならぬ。さうして此の味ひが今も尙、根岸派の後のアララギ派には傳つて、齋藤茂吉さんの歌の持つ善良と、愛敬との一部の因子となつて居るやうだ。かうした純萬葉でもないが、後代の歌と萬葉とで混成したやうな感じ方の誹諧が、出てゐるかと思ふと、「見わたせば」のやうなづぶ近代の堂上風の「もろこしかけて……」の、「霞につゞく」の、と謂つたものが竝んで居る。「舟にして」は、其ほど熱意を萬葉に寄せてゐる所は感ぜられないが、「こにして倭やいづこ、白雲の……」の歌の外貌をなぞつて居る。第五句で急に纏つて來る萬葉感覺が三四句に及んで居る。但、五句は其ほどに反省がある訣ではなく、存外輕い韜晦味に過ぎないのだらう。四句の委細（ツバラカ）した所は、萬葉調を破つてゐる。でも、一首として見ると、二句までの言ひ方の、空なものに響く程、形式だけだが充實して來てゐる。かうした事實を、實作上に感得せない人ではなかつた。彼の萬葉ぶりは、かうした所から、理會が深まつて行つたのであらう。

「むさし野を」、竹の里歌式の本格式なもの。三十二年の「上野や黑髮山に」で見ても、子規にとつては、放ち難い姿だつたのである。同時に寫生歌の啓蒙時代の姿を示してゐるものと言へ

よう。「あり明けの」の歌は、杉のむら立ちが、聯絡不完全のまゝで續いてゐる。俳句・連句の上の聯想づけである。さう言へば、「はら〳〵としぐれて消ゆる」二十日月も、連句そのままである。ともかく、一首の調子は通つてゐるが、從來の短歌とは變つたものである。

おなじ年の歌で、語句だけを拾うて見る。

「…梢より星吹きちらす木枯しの風」も印象風で、純然たる寫生でなく——寧觀念式であるが——ともかく、其に似た效果はあげてゐる。「我が門に立てる枯れ木のほの見えて…」ほの見えてを中心として纏つて來るものは、簡朴で氣分深い寂けさにならうとしてゐる。唯「…星疎らなり。夕闇の空」と常識に墮したものに纏つたのは遺憾だ。「苦の上近く飛ぶ千鳥かも」活きた表現である。寫生として感じさせないのは、上の句の「舟つなぐ三津の港の夕されば」である。勿論伊豫の三津〻濱であらう。難波の三津でない處に現實性が見られる。だが同じ「冬の歌」の中の「風荒るゝ伊勢の浦廻の濱荻」を併せて見ると、此すら空想以上に出てゐる訣ではないと言ふ氣もする。自分の療養した須磨を思うた歌、「…西風すさみ浪立つらしも」は、氣魄のうつものがある。但、すさみはまだ概念式であつた。別の冬の歌二首の「…大井川に　紅葉おし

わけて　筏さすなり」わけてのでだけに、生命の反省はあるが、外は助からぬ氣のするものだ。其と竝んだ「夜をこめて　熊や射つらむ」の三句以下、「曉の血しほ凍れり。白雪のうへに」、二句と放して見れば、大正昭和の寫生歌にも通じるものを持つてゐる。

「水上は嵐吹くらし」とある「紅葉おしわけて」の歌が既に、前年廿七年にもあつて、「木枯しの風吹きおろす」となつてゐる。おなじ歌に手を入れたのが、「水上は」の方である。兩方とも冬の歌と言ひ、一方は題しらずらしいが、ともあれ、季題感が紅葉に囚れて居ない所に、俳句の範圍から、自由なものとして、短歌を見初めてゐたと見られよう。

君が著る羅紗の衣の薄ければ、な吹きおろしそ。から山おろし

こゝにも既に、誹諧味が歌に出て來てゐる。さうして際立つた萬葉ぶりではないが、古今以前の氣分で、新語をひきずつて行かうとしてゐることも同樣である。この年

棚橋に　駒立て居れば、薄月夜　梅が香遠く匂ふ夕ぐれ

「緋おどしの鎧をつけて　大刀佩きて　見ばやとぞ思ふ。山櫻花　―直文」と言ふ廿五年に落合氏の試みた繪樣を更に密畫にした趣きだ。此は寧、淺香社ぶりの王朝趣味或は擬似王朝趣味で、事實時代觀の荒かつた頃とて、武家時代も王朝も、一つに感じてゐたのである。梅が香遠く以下が、別の調子で舊調でもあり、又俳句式敍景とも見られる。だから、子規もなかなか正直に、他の影響を受け易い性質を持つてゐたことが知れる。子規にしても、かう言ふ歌の出來たのを、新古今風（此も當時通有の錯覺）として得意だつたのかも知れない。だから、

朝な〳〵　鶯來鳴く窓のうちに、何物語　人の讀むらむ
大海原　八重の潮路のあと絶えて、雲居に霞む　もろこしの船

など言ふのを作つた。大海原は遣唐使時代の空想で、王朝物であらう。朝な〳〵は、王朝時代と言ふよりも、近代生活を王朝爲立てにしたものである。何にしても、「何物語…讀むらむ」は、あまり無造作過ぎて、今では我々すら、當時の子規の、歌にした氣持が受けとりにくい。おどけたと言ふのでは勿論なからうが、まづ一葉あたりの小說を見る趣きと解する外はない。

かうした無造作が、次に來る歌語に對する異樣な感覺を育てゝ來る。若し、純粹の古典派の人だと、かうしたことも少かつたらうし、從つて此までの歌語以外の用語や、語法をとりこんで來ることも少かつた筈である。其處に、子規のやがて持つべき强さ、珍しさが藏せられてゐるのだと思ふ。

御佛の　いとも尊し。紅の雲か　櫻の花の臺（うてな）か

櫻の花盛りの上野の大佛を廻る花は、紅の雲か。其とも、佛の蓮臺とも、櫻がなつて居るのかと言ふので、理くつの合つたやうなあはぬやうな、出たところ勝負と謂つた風の歌である。

紫の一本やいづれ。　武藏野の叢がくれ　堇咲くなり

寫生ならば活きて來るところだが、此は唯知識の遊戯である。觀念である。紫の一本ゆゑにと謂つた武藏野のゆかりの花を、堇かと考へて、其をゑがらつぼく理くつ爲立てにしたのだ。其當時には、尙かう言ふものを、歌にすることの出來た學者や、歌よみが居た。

紫のひともとにほふ　武蔵野の　草葉がくれの花菫かな

さすがに、子規はもうさうした考へ方は出來なかつた。だからやはり、新しい王朝ぶりとも、堂上風の古い歌口とも、どうとも解せられるかう言ふものが出來て來る。

君來ぬと見し　手枕の夢さめて、　櫻に殘るあり明けの月

歌からは古く、思ひは稍新しいと謂へば言はれる。かうしたものを作つてゐるかと思ふと、一方、

丈六の佛の御手のたなそこに、　雲立ちのぼる　五月雨の空

谷に生ふる葉廣柏の陰暗み、　晝も鳴くなり。　山ほとゝぎす

島山を雲立ちおほひぬ。　伊豆の海　相模の海に、雲立つらしも

三十年代における若い作家の歌は、凡まづ「丈六の」やうな歌からはじめるのが、常であつた。

だからさしたるものとも思はなかつたが、今見れば此二十七年頃に、誇張は誇張であり、空想は空想として訣るが、其でも尙寫生態度を以て、想像に節度あらしめた處はよい。「島山を」になると、たゞの空想を擬似萬葉調—其も一貫する事なく—で語をつけたに止つてゐる。が「谷に生ふる」は內容はないが、俳句で習練した配置配合は過ちなく、歌にしたてゝ居る。五句だけが獨立して聞えるのは、俳句じたてだからである。でも形としては、此が一番歌らしくなつて來てゐる。今も、相當な値打ちのある作だ。

三韓舟中の作に擬す

雲か　あらず。　烟か　あらず。　日の本の山あらはれぬ。　帆檣の上に

三韓とあるけれども、まさか其ほど、古代の人物に自ら擬したのではなからう。一二句氣を負うたやうに聞えるが、子規のものとしては、諧調に安らかに聞くべきである。—かうした處に、當時は男性的な調子を、感受したのである。—なぜなら同樣な詠み口の後の作は、皆長閑なものであるから。三句以下は、もう子規の本領を顯してゐる。語を此程著實につける處から、

寫生歌が起らずには居なかつたのである。

焼大刀を　手にとり見れば、水無月の風ひやゝかに　龍立ちのぼる

龍は、りゆうかりようであらう。此も歌より詩、支那風な題材をとり入れようとしたので、其に相應した調子は出してゐる。二句が洗煉を缺いてゐるやうに見えるが、彼としては、この言ひ方は此後とも續けて行くのであつて見れば、一つの姿を作る要素と見て行かねばならぬだらう。其外に一つ、此年の和漢兩様の趣向の歌について思はせられるのは、後來彼が詠史又は聯作において、聯想を自在にし、又人に其を奬めた作物における想像と、其に價値あらしめる確實性と、眞實味との問題は、既にこの頃にも、子規には、ある解決はついてゐたやうな氣がする。此などは橋曙覽の影響と、私は見てゐる。おなじ風でも、

ことさへぐ　から山おろし　秋立ちて、大砲の音に　馬嘶ふなり

になると、想像を把持するだけの力がない。眞實を感じさせるだけの調子がない。此も、男性

調に見られただらうが、空虛である。

その前年廿六年は、子規が新聞「日本」入社後はじめての作物が出た。廿五年十一月に、社員となつたのである。

松島や　雄島の浦の浦めぐり　廻れど飽かず。日ぞ暮れにける

波の音の闇も　あやなし。大海原　月出づる方に、島見えわたる

夕されば、吹浦の沖の　はてもなく、入り日に群れて、白帆行くなり

此位がまづ、新しい方角を示してゐた。「松島や」の歌は、まだこがらかつたものの内で摸索してゐる様子が見える。結局實感も出ないでしまつて居る。「波の音の」は感激のない一二句が、一首を成立しないものにしたが、三句以下は氣魄が充ちて、其で無明を突破しよう、とするだけの力を見せてゐたと謂へる。「草枕夢路かさねて最上川ゆくへも知らず秋立ちにけり」「立ちこめて尾の上もわかぬ曉の霧より落つる白絲の瀧」など言ふ歌と竝んで、かうしたものがあるのは、さすがである。「入り日に群れて…」と言ふ描寫に、其が度されずに出てゐるこ

とに氣づくだらう。

其でも、此年と前年廿五年は、歌と言へば謂へるものを作つて居る。「うちむれて若葉つむなるをとめらが　かたみの底の　浅き春かも」「年のうちに　などかは咲かぬ。咲けりとも、雪にや埋む。庭の梅が枝」桂園流とも言へるが、やはり「筐の底の浅き春」は俳句から出たものを、「底浅し」に關聯させたまでだらう。「年のうちに」の循環口調は、子規に古くから纒綿して居るもので、俳句と本質に相違ある短歌を、まだ呑みこんで居なかつた。其でかうしたものを目がけても來たことと思はれる。「雨に朽ち　風にはやれし柴の戸の　何を力に叩く水鶏(クヒナ)ぞ」「關守りの招くや　其と來て見れば、尾花が末に風わたるなり」。その趣向の幼稚、此から忽にして新派短歌が出て來たのだ、と思ふと驚かれる。此年以後子規は、日本俳句の選に努力し、作句力も張り充ちて來たのだから、其間に此だけの作のあるのも、自然とは言へ、自ら後年短歌改革に進む階程を靜かに蹈んで居たのだと思ふことは懷しい訣である。

此年以前は、子規の歌として見るべき特殊性のあるものを見ない。一つは僅かながらも、萬葉の歌に接したのは、此頃が初めだつたのだらう。其以前は毫も、さうした痕跡も見えて居な

い。今、廿一年以後の分を順に拾うて見る。

檜の端に栽ゑつらねたる樫の木の　下枝をあらみ、白帆行く見ゆ

ちはやぶる　神の社の榊葉を　起き臥し仰ぐ　我が住ひかな

五月雨に　四方の眺めもなかりけり。堤をゆする隅田(スダ)の川波

さみだれの間なく時なく降る空の　このもかのもに、光り見えけり

さなきだに　ゆふべの風は涼しきを　樅の梢に、月は出にけり

まれ人の　今日は來にけり。草の戸に力の限り　吹けや。川風

花の香を　若葉にこめて、かぐはしき櫻の餅(モチヒ)　家づとにせよ

君ならで　誰にか見せむ。おのれだにつたなしと思ふ　みづくきのあと

——戯に畫をかきて女の許へつかはすとて

言はずとも　思ひの通ふものならば、うちすてなまし。人のことのは

——牛島神社の祭りに、物言はぬ馬鹿踊り見て

二十二年

ほとゝぎす　共に聞かむと契りけり。血に啼く別れせむと知らねば

——服部大人の故郷へ歸らるゝ……別れのつらきをりから、如何にしけむ。昨夜より血を咯くことおびたゞしければ……

二十三年

春風は　吹かぬくまなし。野の道は、名もなき草に、花ぞ咲きける

くさ〳〵の花さきにけり。春の野は、いづこを踏みて　人の行くらむ

二十四年

世を捨てし身とは思へど、雨の日は　菅の古蓑　菅の古笠

かざしたる花の移り香したゝりて、菅の小笠に　そぼつ春雨

つゞらをり　幾重の峰をわたり來て、雲間に低き山もとの里

寢ぬ夜はを　如何に明さむ。山里は　月出づるほどの空だにもなし

庭も狹の草刈りかねつ。撫子の花やまじると　思ふばかりに

百首に近い四年間の作物の中から、一かどある物をと、強ひて拔いて見た。此中まづ無條件に採ることの出來るのは、廿四年の木曾行の「つゞらをり」だけである。此とて、先人の類型を思はせる匂ひの濃い歌だが。其ほかには、廿一年の「堤をゆする」であるが、上句が、子規當時の語を以てすれば、あまり月並である。よい素質を見せたのは、「とのもかのもに」廿四年の「月出づるほどの」位である。此は確かに、子規自身育てゝ行く筈のものであつた。其餘は、櫻餅の歌の誹諧味が子規得意時代のあくどさなく出て來てゐる。歌としては、獨立性は乏しいが、後年の主張の如く、詞書きを助けに見れば、馬鹿踊りの歌に、特異な觸れ方が、出て居ると謂はれる。廿三年の「春風の」「くさ〳〵の」を見ると、かうした所に、新文學に養はれたものの出てゐることは訣るが、歌の形式に這入ると、其がこんなはかない姿に、ちゞこまつてしまふ事が思はれる。大體において、やはり趣向に終始した歌ばかりで、形式も、調子も低いものである。子規も故郷松山に居た頃から、歌は敎つて居ると言ふが、此では當時の桂園派の行つて居た所までも達して居ない。池袋清風その他の人の物と比べて見れば訣る。

此だけの準備を整へてかしま立ちしたのが、子規の新派運動であつた。作物に油の乘り出した

のは、明治三十年或は三十一年の間にあるらしい。だが、彼の短歌に關する評論類の雜誌新聞に見え出したのは、もつと早い。明治二十五年十月日本入社直前には、正岡子規の名で、早稻田文學に「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」と言ふ俳句短歌に關する一文を載せてゐる。二十六年には、おなじ早稻田文學に「歌學雜談」を書いた。二十五年は、新派短歌の上に言ひ合せたやうに、今一つの事が起つた。其は、後來子規及び子規門流と、對踵の地位に立つ新詩社の盟主となる與謝野鐵幹が上京して、落合直文の弟子となるのである。九月の事である。

四　與謝野鐵幹

落合直文は、第一高等學校その他に教職を持つて居た關係上、弟子の範圍が廣かつた。其中には大學その外で、國文學或は他の科に進んで、益盛んに歌や國文學に興味を持ち續けた者も多かつた。其程又直文は、若い精神に深く觸れる所のあつた人柄であつた。直文の學の感化をそのまゝ大學に繫いだ人たちは、廿六年高等學校を卒業して、帝國大學國文科に進んだ、鹽井雨江・大町桂月・武島羽衣等の人々である。淺香社の成立したのには、色々な事情もあるだらうが、落合氏の心をきめさせたのは、此邊にあるのだと思ふ。二十六年二月、紀元節を吉日として結ばれ、二十九年四月まで、詠草發表が續けられて居た。之を見ても、前の諸氏の同級生の大學入學卒業と、何かの關係があると見るのは、間違ひでないやうな氣もする。

此等の人の中、熱心でない人も多かつたし、又後から〳〵入社して來た人も殖えた。其翌年、直文の相談相手でもあり、與謝野鐵幹の爲の師友とも言ふべき鮎貝槐園（房之進―直文の弟）

が、乙未義塾の總監督として渡鮮した。其頃は、此人と鐵幹とがあさか社の中心勢力であつた。廿八年四月には、鐵幹も乙未義塾分校に赴任した。其間、廿六年末には二六新報社に入社して、此時まで勤めて居た訣である。

あさか社は、槐園・鐵幹の渡鮮後も形骸だけでも續いて居たのを見ると、詠草を日本新聞・二六新報に發表しただけが爲事でなく、直文中心に集る歌道執心者の團體の名で、其中發表するに堪へる物だけを出した、と言ふに過ぎないやうに見える。

鐵幹はあさか社詠草以外にも、その作物・評論を柵草紙・二六新報などに發表し初めた。歌は落合氏風の歌と言ふ外はないものが多かつた。此頃、歌論壇で雄飛したと見えるのは、前に述べた紀伊派に屬する海上胤平である。純萬葉風ではないが、その理論から見れば、萬葉を祖述する作家と言ふべき人であつた。長歌に自信を持ち、短歌も、樣式を萬葉に則るべきを楯にして、動もすれば、學と文學とを混同する所はあつた。が、學者歌人に屬する人で、歌よみにも、歌よみ學者にもつれなく當つて居た。明治歌壇では、最後まで御歌所風の歌に張り合つてゐた。鐵幹は、此胤平と、彼槐園との歌風と氣概に感じて、影響を受けた所が多かつたらしい。子規

などに見ても、新聞に關繫してゐた爲、周圍の影響を受けて、政治時事に敏感であつた。唯其は單なる世俗觀より出なかつたとは言へ。鐵幹も新聞人となつて以來、從來よりも更にさうした感激性を高めたやうである。だが、彼のは議論や批評でなく、內容があつた。感情に根ざし深い具體性のものだつた。二十三年を中心として高まつて來た國粹熱が、彼の生活狀態と關聯なく、其心の一方に高い正義觀を持たせてゐた。彼は學統はないが、師以上に國學者の質を持つて居た。一つは育つた環境に因がある。主として京都に成長した。父禮嚴（尙綱）は、西本願寺派の僧であつたが、維新以來の志士その他との交際もあつた。鐵幹の稱する所では、蓮月も愚庵も幼にして知つたと言ふ。父は曙覽とも知つて居た。文學と、愛國の情熱が、彼の青年時代の素行と交涉なく純なものに伸びて行つた。或は其爲に、日常の行動が美的生活に傾いて行つたものとも、辯ずることも出來よう。東上したのは、廿歲であつた。子規は此時二十六。鐵幹の早熟は、驚くばかりである。

廿七年五月、彼の第一獅子吼と謂はれる「亡國の音」を書いたのは、近因遠因相叶ふものが揃つたからであるにしろ、年はこの時やつと、廿二歲であつた。さうした青年が、廿歲上京以前

に既に唯の世人の一生を經た程の經歷を積んで、明りと陰との兩つの隈を持つてゐた。さうして、才の趣くまゝに、彼の周圍を壓倒するやうな傍若無人の態度で、おし廻つたことを想像して見よ。彼の朗らなる飾らぬ方面までも、警戒すべきものと感じさせたのも、頷かれる。謂はば自然主義文學以後の石川啄木の、「あこがれ」發表前後と思へば、彼の行動についての理會は、或は容易になるだらう。啄木時代と違ふ所は、彼の廿代には、政治情熱が世を搖つてゐた。其から來るある荒さが、殊に感受性の强い、國粹精神を豐かに懷いて居た彼には、あまり露骨に出てゐた。而も、反動精神は、ともすれば、寧、國事犯に坐する事を望むと言つた情熱とさへなつた。其に彼自身、天才を自負するに到るやうな機會に度々遭遇してゐる。

大事の前の小事、公事に對する私事、我が身は選ばれた人、まづ我をと謂つた判斷が、若い彼の心を、先へ〳〵と誘うてゐたに違ひない。其が二六新報入社と共に、天下を負ふ士と謂ふ誇りを高めたに違ひない。彼の渡鮮には、他の事情もあるだらうが、必彼の前に、爲す事多き地として、見えたに違ひない。それ處ではなかつた。もはや一觸一發の刹那を待つばかりになつてゐた朝鮮である。事實此頃の韓半島は、天下國家に志ある者の、均しく心を燃すやうな所で

あつた。

興謝野氏赴任後、半年なるかならぬ十月八日に京城事變が起り、嚴妃遭難・大院君入宮の事があつた。此は、公使三浦梧樓京城に著任して、一ヶ月を經たばかりの時である。三浦氏は、十月廿六日、廣島に歸著すると共に、兇徒嘯集罪・謀殺罪の名で、一味と共に囚はれた。此事件が暗示する彼の渡鮮計畫と、其後の事業に與へた積消兩極の影響が考へずには居られない。

鐵幹が、朝鮮に對する執著を全く捨てたのは、明治三十一年であつた。だが、此時まで、靜かに半島に起臥したのではなかつた、幾度か、本土・半島の間を往來したのである。「東西南北」(廿九年七月)も、「天地玄黃」(三十一年一月)も、此間に出版せられて居た。

日本文學大系
第十四卷
近代短歌

昭和十五年二月十六日印刷
昭和十五年二月二十日發行

頒價一圓二十錢

著作者　折口信夫

發行者　東京市日本橋區通三丁目一番地　河出孝雄

發行所　東京市日本橋區通三丁目一番地　河出書房
振替東京一〇八〇二番
電話日本橋二七七七番

印刷者　東京市京橋區銀座西一丁目七番地　福神和三

福神製本印刷所

河出書房刊行

原論篇

第一卷　日本文學研究法　國學院大學教授文學博士　武田祐吉
第二卷　日本文學の本質　東北帝大教授　岡崎義惠
第三卷　日本文學の思潮　東京帝大教授文學博士　久松潛一
第四卷　日本語と文學　京都帝大教授文學博士　新村出
第五卷　日本文學の環境　九州帝大教授　高木市之助

敍事文學篇

第六卷　日本神話　廣島女子大學助教授　倉野憲司
第七卷　物語文學　東京帝大助教授　池田龜鑑
第八卷　中世小說　國學院大學教授文學博士　島津久基
第九卷　戰記文學　早稻田大學教授文學博士　五十嵐力
第十卷　近世小說　法政大學教授　近藤忠義
第十一卷　近代小說　駒澤大學教授　鹽田良平
第十二卷　現代小說　抒情文學篇　片岡良一

日本文學大系

第十三卷　古代和歌　第一高等學校教授　久田潤
第十四卷　近代和歌　慶應大學教授文學博士　折口信夫
第十五卷　俳諧文學　穎原退藏
第十六卷　歌謠文學　浦和高等學校教授　藤田德太郎

思惟文學篇

第十七卷　隨筆文學　東京文理科大學助教授　山岸德平
第十八卷　日記文學　第六高等學校教授　西下經一
第十九卷　宗教文學　大正大學教授　筑土鈴寛
第二十卷　批評文學　文學博士　齋藤清衛

劇文學篇

第廿一卷　古代劇文學　東京高師教授　能勢朝次
第廿二卷　近世劇文學　東京帝大助教授第一高校教授　守隨憲治
第廿三卷　近代劇文學　早稻田大學教授　河竹繁俊

別卷

第廿四卷　日本文學名著解說　史料編纂官補　後藤丹治

日本文學大系・既刊

國學院大學教授 文學博士
武田祐吉著 **日本文學研究法** 四六判一九四頁 定價一圓二十錢

日本文學の研究法とは何であり、如何なる態度でなさるべきか――この理論と實際とを明かにしたのが本書だ。新進學徒にとり學界にとり、研究法といふ科目が何故必要であり何故重要であるか、本書はその課題に端的明快な解答を與へた指導書だ。

第六高等學校教授
西下經一著 **日記文學** 四六判二一四頁 定價一圓二十錢

日本文學に特異の存在を誇る日記體文學。古典より近世までの各作品を拉し、それに抒情的鑑賞と思索的批判とを與へつつ、國民精神の歴史的發展を辿つた名著。

浦和高等學校教授
藤田德太郎著 **歌謠文學** 四六判二八九頁 定價一圓二十錢

最も民族的特徴を持つ歌謠文學が今まで等閑に附されてゐたのは不思議である。本書は率先して歌謠を人々の理解と教養に資すべく著されたもの。これを古代歌謠と近代歌謠とに分け豐富な材料を以て概說、形式、內容の三方面から縷述した研究。

文學博士
齋藤清衛著 **批評文學** 四六判二〇六頁 定價一圓二十錢

日本文學で知性部門の王座を占める批評文學。傳說文學を思想と結びつけ、その科學的精神の闡明を眼ざした、國文學未踏の地に第一の鍬を入れた。批評文學の神髓。

日本文學大系・既刊

潁原退藏著 **俳諧文學** 四六判二〇〇頁 定價一圓二十錢

文部省推薦

俳諧文學は俳諧の歴史的事實を離れては存在しない。本書はさうした俳諧の發生と展開との事實を基としてその文藝的本質を確實に把握したもので、これらの諸要素の闡明によつて明日の俳諧文學の動向が決定せられると云つても過言ではない。

廣島文理科大學助教授
倉野憲司著 **日本神話** 四六判一八一頁 定價一圓二十錢

日本神話の本質の究明は現下日本の緊要事である。それだけに容易な業ではない。著者は凡る困難を克服して、專ら文獻學的立場より批判を齎らし、それによつて國民精神の本幹をなしてゐる國家的精神の本質を表揭した。正に邦家の經緯である。

駒澤大學教授
鹽田良平著 **近代小說** 四六判二〇六頁 定價一圓二十錢

明治初期より大正にいたる滔々たる日本文學發展の跡を忠實に辿つた研究が本書である。近代文學は現代の歴史情勢と如何に呼應し成長し來つたかゞ剔明に點出される。

法政大學教授
近藤忠義著 **近世小說** 四六判一九〇頁 定價一圓二十錢

教養としての日本文學の普及、新方法論の擡頭、かゝる文學界の狀勢の視野を基調として近世日本小說分野の成立史の體系化であり、現代文學の母胎の分析露呈。

日本文學大系・既刊

東京帝國大學助教授
池田龜鑑著 **物語文學** 四六判二一二頁 定價一圓二十錢

日本文學史上特異な地位を占める「物語」の意義の解明より出發して、その發生、發展のあとを歴史的、實證的に考察し、古代の長篇、短篇小說の形態、本質につき定說と異なれる著者の研鑽である。文學の「物語性」の摘出始めて玆になる。

大正大學教授
筑土鈴寛著 **宗教文學** 四六判二二二頁 定價一圓二十錢

宗教と文藝とは不可分のものだ。著者はこの見方で、而も從來の神道文學とか佛教文學とかの固定した考へを離れ、まづ宗教といふ一大思想體系と文學との交渉關係を敍述されてなつたのがが本書である。

第一高等學校教授
次田潤著 **古代和歌** 四六判二二〇頁 定價一圓二十錢

上古の和歌發生期から室町時代の和歌衰頽期に至るまでの、長年月に亘る古代和歌の發達變遷を辿りつゝ、歴史的事實の上に確固不動の古代和歌史を打ちたて古代和歌の價値と意義、その文學精神とを明かにしてある。

九州帝國大學教授
高木市之助著 **日本文學の環境** 四六判一九〇頁 定價一圓二十錢

本書は日本文學の發展を還境との連繫に於いて把捉し、我が國のどのやうな風土と歴史とが日本文學の榮養となつたかを究明し、かゝる周圍的條件の國文學の性格への影響を分析せるもので、豐富な材料と深甚な蘊蓄との結晶である。

日本文學大系・既刊

東京高等師範學校教授
文部省推薦
能勢朝次著 **古代劇文學** 四六判二一六頁 定價一圓二十錢

この書の中心は、世阿彌や禪竹などの能樂藝術に關する藝論で、それを平易簡明に敍述したもの。最初に猿樂發達の概說をなし、また卷末には能樂藝術が現代に如何なる意義を持つかを、現代知識人のために興味深く述べてゐる。

東京帝國大學助教授
第一高等學校教授
守隨憲治著 **近世劇文學** 四六判二〇〇頁 定價一圓二十錢

近世に行はれた演劇として、主なるものは歌舞伎劇と操淨瑠璃劇とである。本書はそれらの戲曲史であるが、國劇の特質として演出中心に發達したわが國の歌舞伎劇を、ここでは俳優史的色彩の優位を去り、戲曲作家を中心に說明した。

早稻田大學教授
河竹繁俊著 **近代劇文學** 四六判二〇〇頁 定價一圓二十錢

「近代劇文學」とは實曆以後現代までを指し、さきの守隨憲治氏著「近世劇文學」を承けて彼が京阪中心であるに對して此は江戸中心である。彼が淨瑠璃や時代歌舞伎に特色があつたのに對し、此には世話狂言と舞踊劇とを中心としてゐる。

東京帝大文博
文部省推薦
久松潛一著 **日本文學の思潮** 四六判二〇〇頁 定價一圓二十錢

本書は文學理論と文學作品とを接近させて、日本文藝觀の流れを跡づけたものである。更に著者の言葉を藉りれば、歴史や風土によつて自ら形成せられる日本的性格と文學性との關聯に於て日本文學性を闡明したものである。

754
1

終